

山 田 眞 龍 軒

らつしやるか 男左様で御座います足無しで御座います 眞
ハ、ア何うしてイザリに成らしつたや 男イザリと云ふ程で
は御座いませんが……歩もうと思ひますれば澤山は歩かせ
んが一日に五里や三里は歩けます 眞何うおすつたんで 男
幼年の砌り山へ遊びに参りまして木の根に躓きました夫れか
らいたして此母指にトケを立てまして途々其が爲に段々と腐
れ込んで来まして所謂高崎の御殿醫に見て貰ひましたらば是
は蛇の骨が差つたので蛇毒が身体に廻つたんだと云はれ
ました其が爲に足ッ首を此通り切つて落しまして今では覺で
御座います 眞ア、御氣の毒千万……失禮だが和郎の在所は
何所であらつしやるや 男ハ、此近邊りで御座います 眞ッ
ム左様かい和郎の身分は何者だい 男御出家能くお尋ね下さ
いましたは何を隠しませう私は是れを此山向うへ越し升ると

山 田 眞 龍 軒

仙田新田と申す者が御座いまして 眞ウム 男豪士與左衛門
と申す者の倅子與之助と申し升者で御座いまして 眞ハ、ア
和郎は豪士の倅かい、私も九州の豪士の倅であるが、ア何んの
爲に斯様な所にあつしやるな 眞其の物語りを致すも此
しい次第であり升は拙者の父は今を去りますと三ヶ年以
前に病死をいたしました 眞ハ、ア阿父様は無くなつて和郎
の舎弟か妹でもあつて家督相続をせよして居なさるのかい
眞イエ其ふでは御座いません天にも地にも手前只一人の眞
左衛門の倅で御座い升 眞ハ、アじゃア他人を御養子にでも
して今日を暮らして居なさるのかい 眞、イエ然ふでは御座い
ません 眞何う云ふ次第だい 眞手前の母と申す者は五歳の
時に没しまして 眞ウム 眞同村の組頭の妹になみと申す者
がありまして其なみと云ふ者をは拙者の父が後妻に申受けま

山田眞龍軒

して父が没して仕舞ひますると母は間庭の水野十郎左衛門殿
 代禱考をいたし升野州水運川の浪人村上三十郎と云ふ者があ
 りまして其者が能遊に参りまして稽古の間になみど心易く
 相成りまして手前が居りましては充分の樂みが出来ません
 爲に朝夕私を奇酷の取扱ひ邪魔に致し升るに由つて何うせ此
 通り足も御座いませぬ人間であり升から寧ろ家に居て然んを
 者を見るよりは知らぬ他國へ走つて仕舞をうと無断に家出を
 しました夫を口實にいたしなして家を立出でたもんだから定
 へは寄せ付けんと云ふ親類縁者もあり升が皆クルに成つて私
 の申すみどは取上げません止無く此所に斯様を住ひをして悠
 氣に今日を暮らして居り升去れば三度の食事も村の者が深切
 に朝晩運んで呉れまする別に慰みも樂みもありませんに由つ
 て成丈け美味い物を運んで呉れまして先づ私には此の山の中

山田眞龍軒

あらん限り暮らして相果てる積りであり升眞アレ〜氣の
 毒千万和郎が並の人間であらつしやるから自分の働きで何う
 とも致すと云ふもともあるが其様子では何うするもども出来
 づ實に氣の毒千万のよどで其樋口十郎左衛門の代禱考をする
 村上三十郎と申す者は和郎の實家へ泊りに行くのか 眞ハハ
 晝間は先生の家に居り升が夜分に成り升と泊りに参り升眞
 ヨシ〜和郎が家へ這入つて家督相続の出来るやうにして上
 げやう 眞イエ御深切は有難ふ存じ升が向ふはあか〜の曲
 者で御座いまして 眞イヤ其心配は爲なるを私ハ斯ふやつ
 てボロンハ虚無僧には成つて居るが何を隠さう肥後宇土の産
 にして山田眞龍軒と申す武藝者である幸ひ此地に来つたぞ云
 ふ者は當時高名に相成つて居る樋口十郎左衛門の腕前を一見
 いたしたく心得て來つた者であるから是より直ぐに樋口の方

山 田 眞 龍 軒

へ参つて立會をした以上又和郎の身を定めて進げる事もある
に由つて安心をしあさるやうに……上ははく能き人
に出逢申して有難き仕合せです何分共に御願ひ申したう存じ
升。互ひに猶も色々の話しをいたして其夜は一泊に及び翌朝に
至り雪の明日は裸虫の洗濯誠に快晴であります後日を約して
眞龍軒再び此れを立出でまして高崎在の間庭を差て來る來て
見ると十郎左衛門の導場は實に立派なもので玄關へ立上つて
眞願む……願む 取次「ドレ是れはお出で先生御在宿で御座
るか 取次師匠十郎左衛門在宿いたして居られ升 眞手前儀
は山田眞龍軒と申す聊か山田流鎖鎌を教授いたす者で世を忍
ぶ身の上でボロン、先生と一本御立會をいたしたく推參をい
たした 取次能くお出でなされた暫時お扣へを 眞委細承知
をいたした。奥へ取次ぐ、洗足を呉れたに由つて導場へ案内眞龍

山 田 眞 龍 軒

軒天蓋を戴いた儘導場へ通る暫く經過て十郎左衛門年餘凡う
五十格好、人品の宜しき人 十是は……ボロン、お出で
れ拙者十郎左衛門で御座る 眞先生の名前雷名の如くに聞
及びまして罷り出でました山田眞龍軒と申す當時眞山宗法で
御座るに由つて天蓋を頂いて居ります失禮ながら御免を頂戴
いたして天蓋を拂うで御座らう。其所で天蓋をバラリと刎ねて
眞龍軒前に進み 眞御門人を以てお取次を願ひ升る通り手前
山田流の鎖鎌を少々指南いたして居る者先生の劍に及びは御
座るまいが立會を願ひたい 土舞つて御座る、双方仕度に掛
る門人は肩を張つて片唾を飲んで扣へる十郎左衛門羽織を脱
て襦十字に絞なして赤樹の木劍を取上げて前に進む眞龍軒は
箱の内より鎖鎌を取つて進む元録の年中に護士傳にて名の高
き堀部彌兵衛武常と云ふ人は看客諸君御存じの通り間庭念流

山田眞龍軒

に入門をいたし、或る一手を編出だし是から念流と云ふ者は不
動剣と云ふ構へに成りましたが未だ此頃には然ふ云ふ構へは
ありませぬ。普通の念流です去れば青眼に取つて前に出る、眞龍
軒は阿雲の呼吸を測つて、眞「マッ……」と氣合を掛け、ブーン
……と打込んで來つた分銅ガラリと木剣に搦む、タイを引くと
する内にブーン……と一方を振込んで來る、打込み來つた鎖を
木剣を持つてガツチリ受ける、眞恐れ入りました、十「イヤ山
田氏實は手前貴殿のお言葉を疑つて居つたが能うもお使ひな
された山田流、威服をいたした、實に恐れ入りました御座います
何うか兩三日御滞在を願ひ門人共に其鎖鎌を見せてやつて下
さるやうに願ひたい、眞未熟なる處、斯く御賞美に預つて赤面
の至り、十先づ此方へ、眞御免……とあつて奥へ通り、由つて
打寛いて酒宴山海の珍味田野の野菜とまでは行きますまいが

山田眞龍軒

充分の馳走でありませう、十「サ何うか召上つて下さるやうに此
通りの山家何も差上げる者は御座らん、眞誠に御手厚の御費
應、千万辱け無いが然し先生此御馳走は、断り申しませう、十
ハ、ア此並べた内に何かお嫌ひなさる者があり升か、お在家の
みとであり升から御馳走も出來ませぬから、最前お断り申した
から取並べましたる御馳走で御座る、眞イヤ決して食好みは、い
たさんが外に御馳走を頂きたう存じます、十「如何なる御馳走
で御座るか、十郎左衛門身に叶うだけの御馳走は仕つりませう
眞左様なら先生御馳走を願ひます、十「ハイ、開き直つた眞龍軒
の有様でケズから何か仔細のあるものと成らんと十郎左衛門威
儀を正しく是を聞く、眞實は妙儀の體察士にいたして奥左衛
門と申す者の一子與之助と申す者に面會をいたした、が斯様云
々御當家の弟、子村上三十郎後家と姦通いたして其家を横領

山 田 眞 龍 軒

をいたさんとして居る由、今日の御馳走には村上三十郎と申す
 者を是へお呼び下されて御理解を下され、猶與之助に家督相續
 の出来るやう御取斗ひの御馳走を願ひたい。聞た十郎左衛門思
 わづ知らづ膝を打つて「十ハ、眞龍軒どの恐れ入つたる仰せ
 委細承知をいたしユラヨ村上を呼べ。三十郎是へ來つて「三ハ
 、ア。年齢三十四五歳立派な男。三何んぞ御用で……」
 十「三ハ、イ。十其方此頃我家に取ねたるも無きと聞及ふ、何
 か悪いふとをいたしては居らぬかと心得て居つたが仙田新田
 の家士の家へ夜なく泊りに來り後家おなみある者と姦通い
 たして其家を横領せんとする已れは痴者、汝等如き者あつては
 間庭樋口の家門を汚するてあるから只今限り破門を仕るから
 左様心得ろ。三「ハ、イ……」
 十「コレヨ村上呆房拂ひにしる。門人
 が左右からバラ〜と來て。甲先生の御一言、村上氏御身が暴

山 田 眞 龍 軒

いに由つて出て行かつしやい。と感々逐出されました、十郎左衛
 門眞龍軒共に色々の話しをいたし其夜は一泊いたして夜が明
 ける仙田新田へ來りまして與左衛門の家に來つておみなる者
 を前に置て「十「万一不都合のことは是れあれば無體打ちにいた
 すから左様心得ろ。二人の言葉に姦通のおおみも大いに驚いて
 艶増す黒髪を髻からツツ切りまして「な此通り墓提を
 吊う爲に居と相成りまして良人を吊ひ升から御湖辨を下さい
 升るやうに早々俵與之助に此家を嗣がせ升。と涙を流して詫
 十郎左衛門眞龍軒名主を以て與之助を穴から迎ひ、是を家督と
 して名主に後見をさせるふにして家士の家をビタリと極め
 猶山田は十郎左衛門の宅に一ト月ばかり滞在をして仙田新田
 の様子を見て居たがおなみも至極謹慎、與之助が立派に家督を
 して別に間違ひも無いやうで御座るから、眞猶此上貴郎は近

山 田 眞 龍 軒

間だから何分與之助の身の上を御守り下さい。十畏りました
某しが譴り居るで御座らう。と受合つた眞龍軒も大きに安心を
して厚く禮を述べ、後日を約して出立に及びました途端に江戸
表に於て三代將軍家光公全國の武藝者を集めて試合があると
云ふ事を聞いて是非此席に連らなければ相成らんと心得たに由
つて其所で間庭を出立をいたしましたして是より高崎の御城下に
掛らんとして並木に掛つて來りますと三抱へもあらうといふ
松の木の後から物をも云はづ突然に切つて出でたる者がある
眞龍軒体を變して弱腰をドンと蹴て四路くど踏く所を襟袷
を掴んで顔を上上げて能く見ると是れ村上三十郎なり。眞ア
コレ村上貴様は憎い奴だ、殺して仕舞う奴であるが佛門に入り
たる吾等成丈け人命は絶ちたく無いに由つて助けて遣はすか
ら必づ以後了見遣ひをいたすま。三先生誠に了見遣ひをし

山 田 眞 龍 軒

て相済みません何うか御勘辨を下さい升やうに……
り以後悪い事をたした所を見ると命は無いから覺悟をしろヨ
三畏りまして御座い升。眞ア許してやる行けッ。ビシッ横
ズッ類を一ッ張られて頭を抱へたなり三十郎、猫に追はれた良
の如く放々の体で逃げて仕舞つた、扱て眞龍軒は江戸表へ出て
來て細川家に願つて其所で三代家光公の御前に出て其所で抑
も本編第二席に申述べました眞龍軒の相手は仙臺て鬼の夫婦
と云われたる伊井直人で御座います番組等は寛永御前試合と
云ふ大昔しの昔物に殘らず出て居り升から今更此所は口流は
いたしませんが右伊井直人と云へる柳生流の劍者を美事に打
負かし、諸大名旗本諸役人ヤンヤト云ふ聲を揚げて翠める、是れ
を妻のゑさだがお幕張りの内に居て拜見をして居りましたが
如何にも無念至極であり升から其所でゑさだが願つて眞龍軒

其代

山 田 眞 龍 軒

と立會に及ぶ、容易に其勝負が決しませんが、角力に云ふ引合、然し眞龍軒が七分の勝ち、先づ眞龍軒としての腕前では相掛が婦人だけに割が悪う御座いました、伊井直人を負かした所から眞龍軒の名は世の中に輝き渡り、何れの人でも眞龍軒の名人として知らぬ者は無い位に立至りました、最早天下に名も揚つて思ひ残す所はありませんが、由つて江戸表を出立に及んで國表に歸る積りて東海道を段々と登つて来り、尾州名古屋へ來つて牛頭天王の參詣して、うれよりいたしまして桑名へ出やうと云ふので佐屋の渡舟場へ來りまして、船が向ふに居り升に由つて傍への茶見世へ……眞龍アや好い天氣じゃあ、母左様で御座いました、好い天氣で御座います、探登の上へ尺八を置き煙草を煮らして、婆アの酌んで出した茶を飲んで居る所へ二人連れの侍馬に跨つて此方を差して來る、前に立つたは大きな

山 田 眞 龍 軒

侍、黒羽二重の衣類に羽織袴、今此所まで來つてヒラ、馬から飛下りる途端に足が縁邊に觸り、縁邊が削れましたから傍へにぶつた笛がコロコロと大地へ落ちる、彼の人笛を落して知らざる顔をして向ふを見て居る眞龍軒、大きに怒つて眞龍軒へあさい是れは拙者の手笛で御座る、口に掛ける者、然るを御身大地へ落とすとして知らぬ顔をして一言の詫もしあさうと云ふのは甚だ失禮の至りで御座らう、侍イヤトンと必注させませんで、甚だ慮外をいたして御勘辨を……○貴殿お見受け申せば武邊御修業のお侍と見受け申すか、修業であらうしやるか、侍如何にも修業の者で御座る、眞手前も無償には相成つて居るが、矢張修業者の一人で御座る、一本の立會をいたさうでは御座らんか、侍イヤ、其儀ばかりは御用給を、眞龍軒らつしや、我尺八をば大道へ番して置て一言の申譯もいたさんと番試合を

山 田 眞 龍 軒

と立會に及ふ、容易に其勝負が決しませぬ、角力で云ふ引合、然し眞龍軒が七分の勝ち、先づ眞龍軒としての腕前では相手が婦人だけに割が惡う御座いました、伊井直人を負かした所から眞龍軒の名は世の中に輝き渡り、何れの人でも眞龍軒の名人として知らぬ者は無い位に立至りました、最早天下に名も揚つて思ひ残す所はありませんが、由つて江戸表を山立に及んで國表に歸る積りて東海道を段々登つて來ります、尾州名古屋へ來つて牛頭天王の參詣してうれよりいたしまして桑名へ出やうと云ふので佐屋の渡舟場へ來りまして、船が向ふに居り升に由つて傍への茶見世へ……眞婆アや好い天氣じゃあ、母左様て御座いますして好いお天氣で御座います。株蓑の上へ尺八を置き煙草を煮らして婆アの酌んで出した茶を飲んで居る所へ二人連れ、侍馬に跨りつて此方を差して來る前に立つたは大きな

山 田 眞 龍 軒

侍、黒羽二重の衣類に羽織袴、今此所まで來つてヒラリ馬から飛下りる途端に足が株蓑に觸り、株蓑が剝ねましたから傍へにあつた笛がコロコロと大地へ落ちる、彼の人笛を落して知らざる顔をして向ふを見て居る眞龍軒大きに怒つて眞お扣へあさい是れは拙者の手笛で御座る、口に掛ける者、然るを御身大地へ落とさして知らぬ顔をして一言の詫もしあさらんと云ふのは甚だ失禮の至りで御座らう、侍イヤトンと心注させんで甚だ慮外をいたして御勘辨を……○貴殿お見受け申せば武遊御修業のお侍どお見受け申すは修業であらつしやるか、侍如何にも修業の者で御座る、眞手前も虚無僧には相成つて居るが矢張修業者の一人で御座る、一本の立會をいたさうでは御座らんか、侍イヤ其儀ばかりは御用拾を眞駄らつしやい、我尺八をば大道へ落して置て一言の申降もいたさんで稽試合を

山田眞龍軒

申し込んで辞すと云ふ法やある、イザ来い侍左様なれば、御座らん然し相憎取急ぎましたに由つて是、竹刀木刀を持参いたしません眞劍で御座るぞ、眞ヲ、道理好める所、待長まつて御座るが貴公は何んど云ふ御姓人の姓名を問はんとする時は先づ我名を云つて申するから某しから名乗り申さん拙者は柳生流劍者荒木又右衛門、眞ヲ、荒木であつたかや、好い所で逢へば逢うもの、吾は山田眞龍軒なり、貴殿の柳生流の腕前賞腕をいたさん、荒木も驚いたが山田も驚いた、又今日本に名高き眞劍の名山田眞龍軒とは此人であるか此りやア、マエくすれば乃公の身が累卵いと思つて居る眞龍軒も、眞荒木とあつては油断は出来んと是も口には云はねど心の裡互いに仕度をいたして前に進む、荒木は敵を追つて此所まで来たのであり、升から夫れを逃がしては相成らんと気が急いで居り

山田眞龍軒

升から又「ヤッ……」と打込んで来た奴を、眞「エイ……」アッパの大刀へ搦む、万一刀引にでもされては成らんと思ふから手許へ引くことが出来ないと云つて刀を引かなければ、鎌が飛んで来る、流石の又右衛門も進退爰に極つてパツと刀を放し、ハラハラと逸足いたして傍への藪の中へ飛込む、眞「ヤ、卑怯なり、荒木返せ戻せ……」と云ふ時に卑怯の一言止無く、小刀をギラリと抜いて切込んで来る、又も爰に二三合戦つて居る時に如何したか、小刀に搦まれて又右衛門此鎌を切るふとが出来ん、眞龍軒鎌を取直して今や又右衛門の首を刎ねんとした、彼の時遅く此時早くパツと飛んで来て一人の若者、若己れ能くも我兄を害せんとするや、観念しろと、太刀を抜いて切つて掛る、眞龍軒を飛鳥の如くに變して右の手で彼の若者を小脇に搦込み、眞「コ

山 田 眞 龍 軒

レ眞龍の立會をいたして居るのに横合から切込むと云ふ法があるか武士の法を欠て居る奴己れも一命を取つて遣はす若御出家許し玉ひ 眞イヤ今に至つて許せとは何事だ 若イヤ暫く……何を隠う某しは池田宮内大輔の家來にして渡邊頼負が伴敷馬是れあるは元又右衛門のことでありまして河井又五郎の爲に父を討れ誠に残念であるに由つて仇討をせんとする杖とも柱とも頼む兄又右衛門のを貴殿に討たれた其時は暗夜に燈火を失ふたるが如く父の修羅の妄執を果たする理由に不可んに由つて法を辨へて居りながら武士の道に背いた致し方何分御勘辨に預りたい万一強つて御許し無きとあるれば吾等を切つて又右衛門のだけを御助け下さいまし。眞龍軒も鬼じやア御座いませぬ蛇では無い大いに驚いて其手を放して眞イヤ、數馬殿で御座るか失禮をいたした……又右衛門先生甚

山 田 眞 龍 軒

だ慮外をいたした偏に御勘辨を……又右衛門從容として又イヤ眞龍軒の失禮を致しました遂氣が急ぐが爲に斯様とをいたして御免を……眞拙者が無禮をいたしました、サハ急ぎあれ……然し數馬の又右衛門の今世間に名の高き相手は多人數の由先方は三十六人御役には立んが某し助木刀を致したく又其思召は千萬辱け無いが此儀は大久保彦左衛門の御内命も有之るに由つてお断り申上げます 眞左様か然らば急ぎあれ何れ御本懐を遂げたる上改めて御面會をいたすも御座らう 又然らば御免……と左右に別れる扱て此所に置て演者が鳥渡申上げて置きましが荒木又右衛門の傳記を見ると此所で眞龍軒が殺されて敵の有所を教へるといふことが書てある然しおがらは是は荒木の腕前を渡やうとして知らづ聞らづ眞龍軒に疵を付けた者で御座います、荒木

山 田 眞 龍 軒

も名人から山田も名人、又右衛門とて腕が鈍かつたら分銅で頭蓋骨を裂られて仕舞つたでせう、由つて決して眞龍軒は此所で殺されたのではありませぬ、扱て眞龍軒は敵馬の後姿を見送つて眞ア、一親孝行の次第である……ヲ、親孝行で思ひ出した肥後の宇土へ立歸りぬ、父上母上様にも久しく手紙を出さざるに由つて御心配を遊ばしてあらつしやるであらう、父母在す時は遠く遊ばす、實に吾れ親不孝でありし、是れから國表へ立歸り御老人の機嫌を聞かぬば成らん。と敵馬又右衛門の身の上を感じて己れが両親を思ひ出して眞龍軒は是れから肥後の宇土へ立歸り見るとモ一両親が死んで仕舞つて居ない、其所で涙ながらに両親の墓場へ參つて厚く詫を述べて今迄はホロンマ虚無僧でありましたか、両親の墓掘を掘う爲に今度ば頭の飾りを下しまして是れより和尚と相成つて年齢七十三才迄無事でありまし

山 田 眞 龍 軒

たエ、延寶元年秋八月二十一日

ふと足りぬ浮世に吾れは生れ來て

今日ことたりて夢を覺めけり

と云ふ辞世を残して逝去いたしました肥後宇土山田の郷泉王寺と云ふ禪寺に今持ちまして墓が残つて居る、其墓に此辞世が切付けて立派に残つて居ります、看客諸君御序での節廻つて御覽なさい、なか／＼景色の好い所であり升、扱て永々申上げました山田眞龍軒の儀も豫め是れで大尾と相成りました、又跡よ何か變つた面白いのを口演いたしませう、御退屈様……

山 田 眞 龍 軒

大尾

明治三十年十二月廿八日 印刷
明治三十年十二月廿一日 發行

講談叢書卷之壹

版權所有

編輯者兼 鈴木源四郎

東京市日本橋區長谷川町一番地

印刷者 小宮定吉

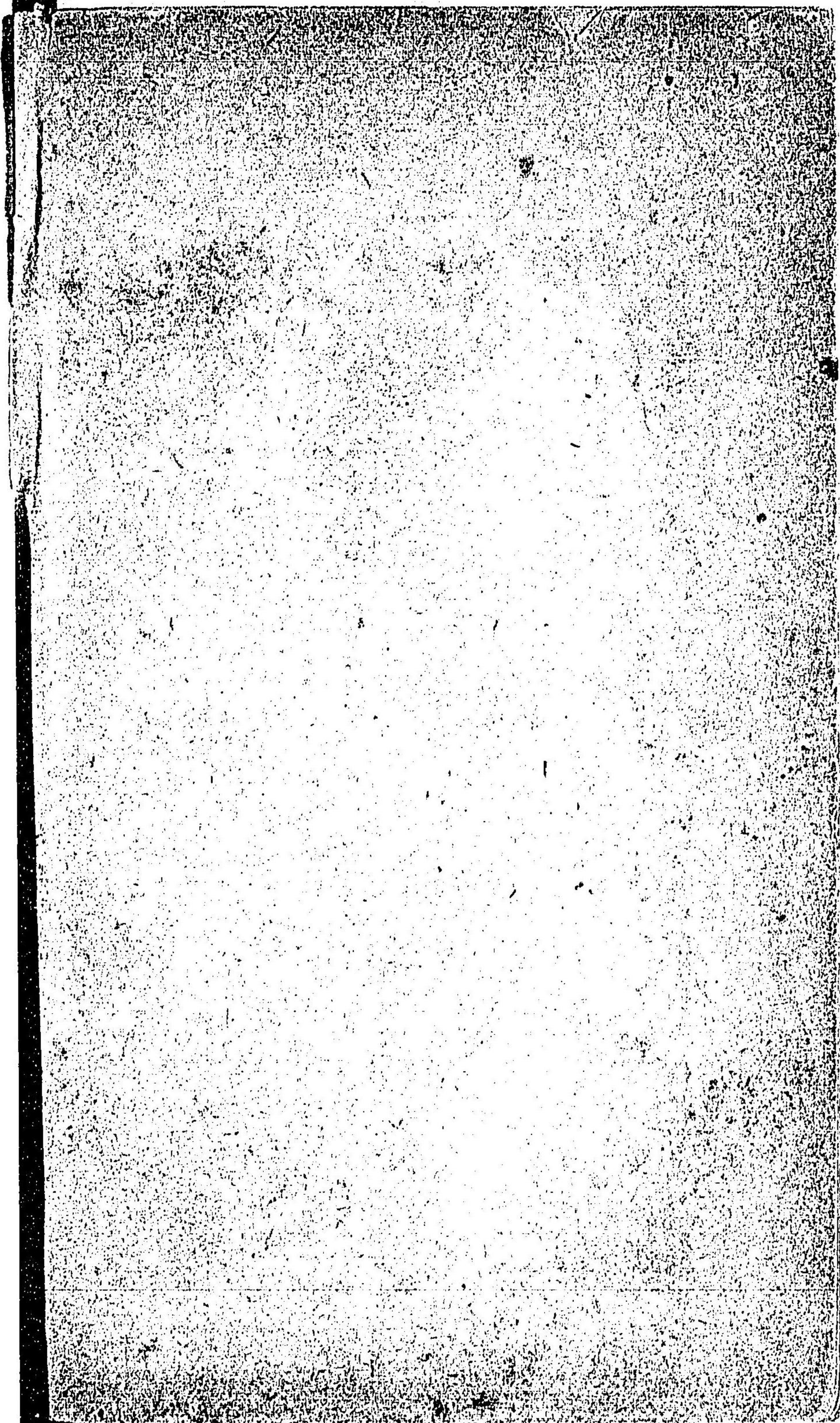
淺草區森田町五番地

印刷所 同 大川屋活版所

發行所

東京市日本橋區長谷川町一番地

錦集堂



5855

特 8

196

真龍齋貞水講演
加藤由太郎速記

山田真龍軒全

講演叢書卷之三



097786-000-6

特8-196

山田真龍軒

真龍齋 貞水/講演

M30

DBS-1725

